

PDF issue: 2025-10-12

ファン研究における理論の紹介 : 文化産業と大衆社 会への批判から、ファン文化におけるナルシシズム への批判まで

Alvaro David Hernandez Hernandez

(Citation)

社会学雑誌,35/36:226-247

(Issue Date)

2019-07-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

https://doi.org/10.24546/E0041991

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041991



ファン研究における理論の紹介

文化産業と大衆社会への批判から、ファン文化におけるナルシシズムへの批判まで

Álvaro David Hernández Hernández

国際日本文化研究所・プロジェクト研究員

性がどう議論されてきたのかを紹介する。 との間の関係がとう議論されてきたのかを紹介する。 との間の関係がと「ファンテクスト」と呼ばれているファンで産業や大衆社会への批判から生まれたファン研究から、化産業や大衆社会への批判から生まれたファン研究から、が産業や大衆社会への批判から生まれたファン研究から、ないがどう議論されてきたのかを紹介する。

はじめに

大衆文化 文化の産業化と文明の終末論者が論じる

年代・三〇年代における映画とラジオの普及をきっかけ二〇世紀の冒頭における大規模な新聞企業の成立と二〇

代から七〇年代において展開された。Pierre Bourdieuは 年に出版されている。また六○年代にカルチュラル・スタ ン』を書き、一九七九年に出版した。Marshall McLuhan 年代から、特にスターリニズム、ナチズムとアメリカ社 左翼〉に影響を与えた。これを背景に Umberto Eco は、 弁証法』(一九四四、一九四七)は一九六九年頃から〈新 ディーズが生まれる。Horkheimerと Adorno の『啓蒙の の有名な『人間拡張の原理―メディアの理解』は一九六四 一九六三年から一九六八年にかけて『ディスタンクシオ いる。Michel Foucaultの権力に関する議論は主に六〇年 デオロギーを『神話作用』(一九五七)において批判して て、Roland Barthes は大衆文化に現れるブルジョワのイ 化〉や〈文明〉に関する議論が盛んになった。その例とし 会における〈大衆〉の位置を考慮に入れながら、〈大衆文 に〈大衆文化〉に対する意識が高まり、 五〇年代・六〇

integrati』(一九六四)を公開している。 る二つの〈対立的〉な基本視点について論じ『Apocalitticieの一九六八)を公開する前、大衆文化の研究において現れてス・メディアの分析方法を展開している『記号論入門』

者を文明の〈終末論者〉、そして後者を〈統合論者〉と呼ぼう。も現れてきた。本稿では、Eco(1968)の言葉を借りて前立したといえるが、少しずつ、新たな夢を見始めた知識人の議論は主に、モダンに失望を感じた知識階層によって成れば、この時代

述べている。一方、〈統合論者〉は資本主義市場の見栄え

は強調したい。

〈終末論者〉は大衆文化に文明の転落を見る、と Eco は

の支配を獲得する資本主義の仕掛けを表現しようとする業時代において、合理的にイデオロギーを押し付け、大衆で、〈文化産業〉の議論を唱えている。簡単にいえば、〈文化産業〉の議論を唱えている。簡単にいえば、〈文は産業〉という概念によって Adorno と Horkheimer は産出発すると言える。例えば、主にラジオと映画の産業を事出発すると言える。例えば、主にラジオと映画の産業を事出発するという概念によって Adorno と Horkheimer は産いるとする。ここで、文化の研究は、文明の〈終末論〉からとするとするという。

において〈文化〉の役割を重視しようとする試みが見らに、〈文化産業〉という概念にはマルクス主義的な枠組みStrinati(1995)や Thompson(1990)が指摘するよう

(Adorno & Horkheimer 1994)

の展開に強い影響力を持つ重要な概念であることをここで Thompson 1990、など)、そして〈イデオロギー〉の概念には、〈文化〉の概念は体系化されておらず(Giménez 2005;は、〈文化〉の概念は体系化されておらず(Giménez 2005;は、〈文化〉の概念は体系化されておらず(Giménez 2005;は、〈文化〉の概念は体系化されておらず(Giménez 2005;は、〈文化〉の概念は体系化されておらず(Giménez 2005;は、〈文化〉の概念は体系化されておらず(Giménez 2005;は、〈文化〉の概念は体系化されておらず(Giménez 2005;は、〈文化〉の概念は格別のでルクス主義において、公式には経済的な決定論に対する批判が含まれているために、(Strinati(1995)、Thompson(1990))、後のファン研究の概念であることをここでの展開に強い影響力を持つ重要な概念であることをここでの展開に強い影響力を持つ重要な概念であることをここでの展開に強い影響力を持つ重要な概念であることをここでの展開に強い影響力を持つ重要な概念であることをここでの展開に強い影響力を持つ重要な概念であることをここで

よった。 この対立から提起されるヒエラルキーと呼ばれるように対〈文化〉の区別上に成り立つ、広い意味の文化の概念の観になく、一九世紀のドイツの知識人における〈Kultur〉対はなく、一九世紀のドイツの知識人における〈Kultur〉対はなく、一九世紀のドイツの知識人における〈Kultur〉対はなく、一九世紀の大祖学的な〈自然〉とが持つ〈文化〉の概念は二〇世紀の人類学的な〈自然〉とが持つ〈文化とサブカルチャーと呼ばれるように、この知識人たとかし、Thompson が指摘するように、この知識人た

系のなかで弱者の位置に置かれているため、現代社会にお見なしてもいい。〈終末論〉においては、〈大衆〉は経済体オロギーは人々の思考や世界観などを支配する道具としてまた単純化されたマルクス主義の観点から見れば、イデ

けるイデオロギーの役割が議論の中心になった。

Barthes は記号学の視点から似たような議論をあげる。 Barthes は記号学の視点から似たような議論をあげるの神話によってブルジョワのイデオロギーが正当化されと主張する。要するに、テクストを通じて支配階級のインコギーが当然なものであるように見せかけられていると主張され、この働きを〈神話〉と呼ぶ。つまり大衆文化と主張され、この働きを〈神話〉と呼ぶ。つまり大衆社会のテクスト(例えばメディアのメッ被によれば、大衆社会のテクスト(例えばメディアのメッを主張され、この働きを〈神話〉と呼ぶと言います。

リーユ記 こうけいは こうこくさせい しかし全ての〈終末論〉がイデオロギーと階級闘争の役とする(Barthes 1956; Strinati 1995)。

Eco 1968)°

化にも手が届かないため、〈意味の欠落〉を感じるとされ 他にも手が届かないため、〈意味の欠落〉を感じるとされ を業化と都市化から生まれた〈大衆社会〉自体にあるとさ で作られた文化であるという観点が強い〈Strinati 1995)。この議論において〈大衆文化〉の根本的な問題は、 を業化と都市化から生まれた〈大衆社会〉自体にあるとさ を業化と都市化から生まれた〈大衆社会〉自体にあるとさ をだ。大衆は伝統文化や共同体を失い、そしてエリート文 とだ。大衆は伝統文化や共同体を失い、そしてエリート文 とだ。大衆は伝統文化や共同体を失い、そしてエリート文

すのは産業しかなくなる。故に、

その〈意味の欠落〉から生じる憂鬱や不満を癒や

大衆文化は、

大衆がみる

替物にすぎないとされている(Strinati 1995; Morin 1979: 可一ト文化の浅薄な模倣であり、有意義的な人間関係の代このように生み出された文化は、どうしても伝統文化や工造されており、大衆の欲望や感情性が産業によって単純にとされており、大衆の欲望や感情性が産業によって単純にとされており、大衆の欲望や感情性が産業によって単純にとされ、パターン化され、ゆがめられ、大量に生産され、夢や嗜好などによって構成されているが、産業によって単

趣味 がら大衆的に人気のある Hemingway の小説、 を〈midcult〉と呼ぶ。ハイカルチャーとして評価されな culture〉ではなく〈masscult〉と呼ぶ。さらに 欲求を満たすために生産され、消費されるものであるの えば Macdonald にとって大衆文化(mass culture) Eco はこの がその例としてあげられる(Macdonald 1962)。 の生産物であり、 で「文化」と呼べない。そのため Macdonald イカルチャーのパロディー(模倣)であり、それは単なる 批判した Dwight Macdonald はこの立場を代表する。 戦後の米国における商業主義と文化の大衆消費を厳 の構造」という節で取り上げる(Eco 1964)。 (midcult) ハイカルチャーの見せかけであるもの の例を、「Kitsch」を分析する「 (masscult) 『老人と海』 mass しく

て、この議論に対して ける無視できない矛盾や葛藤を鋭く表した議論である。さ る議論に色濃く残っている。これらはむしろ現代文化にお 映されている。そして、異なる政治的・社会的な分脈にお れらの精神は〈サブカルチャー〉という批判的な言葉に反 大衆社会論などは、それぞれ共通点と相違点があるが、そ 紹介した。マルクス主義、 では文明の 窺うことができる。ここまでに、大まかではあるが、 いて、この文明の〈終末論〉の影響は現代のファンに関す スポーツなど)がどんな社会的位置に置かれているのかを ファンが好むテクスト(映画、テレビ番組、 〈サブカルチャー〉という言葉に注目することによって 〈終末論〉と呼んでいる立場の視点をいくつか 〈統合論者〉はどんな貢献したのか フランクフルト学派、記号学、

では無い。Adornoは『Minima Moralia: Reflections from Damaged にはture》を巡る言説の二つの主な傾向の一派を例える表にUlture》を巡る言説の二つの主な傾向の一派を例える表トではない。むしろ、Eco(1968)が示すように、〈popular トではない。むしろ、Eco(1968)が示すように、〈popular トではない。むしろ、Eco(1968)が示すように、〈popular トではない。むしろ、Eco(1968)が示すように、〈popular トではない。むしろ、Eco(1968)が示すように、〈popular との言葉を表している。

を少し見てみよう。

る (Barthes 1975)。

Fiske や Jenkins が参考にする de Certeau の〈文化におけ といえる。これに対し、子供は目的のない純粋な遊びを には何らかの目的がなく、それゆえ交換価値に従属してい Pleasure of the Text』も同じ路線で重視すべきなのであ る抵抗〉の観点を先行する(Hills 2002: 33)。Barthesの『The いう (ibid)。 することで、この偽りの世界から逃れられると Adorno は モノのモノ自体の現実を隠蔽する合理的理性の幻である ノを他のモノと交換できるが、Adorno にとってこれは、 大人はモノとモノの間に同等の価値を見出し、それゆえモ ないモノの使用価値に出会うとする (Adorno 1951: 230)。 かわないとする。まだ堕落していない子供の純粋の遊び 交換価値からのがれ、モノをそのモノ自体としてしかあつ 着目する。Adorno によれば、遊びによって子供がモノの Life』に掲載されている小さなエッセイで、子供 Matt Hills が指摘したように、この考え方は の遊びに

ミンガム学派の文化研究の影響を受けて、大衆文化を肯定代には六〇年代と七〇年代のカウンターカルチャーやバー動することは稀であり、むしろ文化の現場において活層の思考を示す一方、初期の〈統合論〉は基本的に知識人層の思考を示す一方、初期の〈統合論〉は基本的に知識人しかし、〈終末論〉が主にモダニズムに失望した知識人しかし、〈終末論〉が主にモダニズムに失望した知識人

きく影響を与えたのである。 スタンスとして評判された John Fiske はファン研究に大的にみようとする学者が増えた。その中で、特に楽観的な

釈〉、〈遊び〉、〈愉快〉、〈パフォーマンス〉、〈現場性〉、〈奪 かで、どのように人々が生きていくのかを説明しようとす 的・経済的な力関係に左右されている近代文化の状況のな であるだろう。かつ、〈統合論者〉は非対称的である政治 なぜ矛盾を受け入れる必要があるかというと、〈統合論 盾を受け入れる必要があるだろう。 況において行為者の自由性を唱えるのなら、 が重視されていたのに対して、〈統合論〉 る。結論からいえば、〈終末論〉では〈経済〉、〈イデオロギー〉、 合論〉は最初からこうした矛盾を受け入れたと言えよう。 (Fiske 2011: 4)。文明の〈終末論〉が近代文化における矛 〈社会〉、〈国家〉、〈制度〉、〈産業〉など、〈構造〉の決定力 Fiske にとっては大衆文化はそれ自体が矛盾して 〈終末論〉が記述した状況を徹底的に否定出来ないから (例えば文化の産業化) を厳しく批判したのに対し、(統 など、〈行為者〉の自由性に注目する。 は〈抵抗〉、〈解 非対称的 どうしても矛

れているのか、という問題、②〈popular culture〉は産業から押しつけられているのか、それとも人々によって作らた。それは、①〈popular culture〉は〈上〉(つまり権力側)それ故、Strinatiが提起した次の問題が議論の中心になっ

題である(Strinati 1995: 3-4)。 題である(Strinati 1995: 3-4)。 題である(Strinati 1995: 3-4)。 の民主じているが故に〈文化の普及〉、つまり〈文化の民主化〉かつ文化の進歩に貢献したのか、という問題。 という問題。 を通じて人々は支配階層の権力に挑戦するのか、という問題。 を通じて人々は支配階層の権力に挑戦するのか、という問題。 を通じて人々は支配階層の権力に挑戦するのか、という問題。 を通じて人々は支配階層の権力に挑戦するのか、という問題。

〈統合論〉の立場からみれば〈終末論〉は、モダニズム〈統合論〉の立場には社会的・文化的変動を理解しる。つまり〈終生を理解しようとしない。そして〈popular culture〉における多様性も軽視し、権力者対弱者の単純な対立に陥やすい。また〈終末論〉にはエリート主義の側面が強く、エリートまた〈終末論〉にはエリート主義の側面が強く、エリートまた〈終末論〉にはエリート主義の側面が強く、エリートまた〈終末論〉にはエリート主義の側面が強く、エリートまた〈終合論〉の立場からみれば〈終末論〉は、モダニズムりないと〈統合論〉は主張する(Strinati 1995)。

究の誕生 三 Eco, Fiske と Jenkins から見たファン研

他の国々の文化産業に影響をもたらしたアメリカ社会のからファン研究が生まれた八〇年代後半の間にかけて、では、ファン研究に着目する前に、第二次世界大戦後

プカルチャー〉の誕生に窺える変遷であ 生とその死から生まれた新たな〈サブカルチ (popular culture) 言で表現すれば、これはカウンター おける大きな変遷に 少し目を向 力 ヤー ル チ 7] 0 け ょ ツ

ピー運動を生みだした。当時の大衆文化は、 ス・ 判や政治学の 衆文化の領域において起こった変貌に注目すれば、 ルチャーは 力が巨大な規模に達した消費社会のなかで、カウンター ところが七〇年代に大きな転換があった。すなわち、 やウッドストックなどのシンボルによって代表され、 した当時の若者に牽引されていた大衆文化は、ビー 観からの離脱を表象した。また六○年代の保守主義に反発 急速な拡大と消費社会の成立の展望におい リカ社会から出発した五 次第にカウンター ルチャーの枠において、批判的な政治経済学と合流 冷戦とマッカーシズムの保守主義的背景のもとに、 プレスリーやマリリン・モンローは戦前社会の 衆文化 文化 SFやファンタジーのジャンルが盛んになり、 ☆調に満ちていた六○年代前後の大衆文化 0 営利主義と統 産業の カルチャー 主流に統合した(Coma 1978)。 ○年代のマス・メディ 合する事になったといえる。 における 〈終末論〉 ては、 カウンター -アの権 的な指向 エル 社会批 1 した。 生産 グヴィ 労の ヒッ jレ 世 ア カ 0 ズ X

> は反抗的な精神があるものの、 は、 生まれたファン研究の背景を成していることを強調したい。 年代から今までの絶え間ない社会の変遷を反映 風に批判すればいいのかが明確ではない。 れるようになる。 的な葛藤の重視の代わりに、心理的な葛藤が段々と重視さ さらに反抗的な精神を引き継いだ新たな 判は薄まり、または削られ、 その批判を指導する一貫したモデルを段々失い ファンタジー かくして、新たな 指向などが含まれ あるいは顕在的では 何に対して、またどういう ているが、 〈サブカルチャー〉に 〈 サ ブ この文脈は六〇 カルチャー) 政治: 米国で 的

学者は 化に関して出版された論文においてコミックス、 会が生み出した神話に魅力された大衆の立場に立つ。 文化のテクストの分析方法にあるといえる。 F小説やテレビなどに対する自分の愛好を宣伝した最初の 研究の展開を窺うことができるだろう。おそらく、 基本的主張を順番に紹介する。そうする事によってファン 以下、 確かに Barthes また Barthes の意図はテクスト ズムも注目すべきである。 Ecoだろう。 ファン研究を中心にして、 その批判である。 (産業の文化) ではなく、 はこれに先行するし、 まとめるならば、 ところが、 しかし、 Eco, Fiske, Jenkins © 寓話や民話を対象にす の神話を解体すること Eco はまず、 Eco フォル ロシア・フォル この点に の貢献は マリズムは 探偵やS 関し 大衆

頃のカウンター 要するに大きく言えば

カルチ

ヤー

〈ポップカルチャー〉には六○年 の影響で生まれた世界観

した調査を行っていないが、そのコミック、小説や〈悪趣する必要があると述べる(Eco 1968: 34)。Eco 自身はこう側と受け取る側双方の社会的・歴史的・文化的状況を調査するにメッセージの形態の分析を超え、メッセージを送るな背景などの検討も必要であるとする(Eco 1968: 78)。要な言などの検討も必要であるとする(Eco 1968: 78)。要な言などの検討も必要であるとする(Eco 1968: 78)。要な言などの検討も必要であるとする(Eco 1968: 34)。Eco 自身はこうであるとが、作品の普及方法と見なし、その構造の分析に留まらず、作品の普及方法と見ない。

定を主張する観点ではないのである。 に形態と構造の分析が重視されているが、決して構造の決は抽象的な一般読者像に還元しない。Eco の分析では確かない解釈が生じる可能性なども説明している。つまり Eco 釈過程を重視し、メッセージの作者に全く想定されてい釈過程を重視し、メッセージの作者に全く想定されてい釈過程を重視し、メッセージの作者に全く想定されている階層的位置付けとの関係が確かに意識されている。Eco は

性が窺うことができる。

読者や消費者、

かの説明を試みており、そこでは常にメッセージの構造と、

作者などの置かれている文化的・社会的

などの構造の分析では、なぜテクストに魅力があるの

究において Eco はそれほど注目されている論者ではない。Eco の著作を部分的に参照しているにとどまり、ファン研様な面で先行している。しかし、Hills や Sandvoss などはEco のコミック、小説などの分析は後のファン研究を多

から、似た理論的資源を扱っている点にあるといえる。から、似た理論的資源を扱っている点にあるといえる。むしろファン研究と Eco の類似性は、両者とも似た観点

する。 ば 〈popular culture〉 の culture〉の研究における第三番目の立場を唱えたいと述 は (popular culture) Culture (Fiske 2011) マンは革命を起こさない」(Eco 1968) が、Fiske によれ は無いと強調する。確かに Eco が述べたように 「スーパー 歩」的であると主張しようとするが、同時に「急進 べた (Fiske 2011: 18)。 Fiske は (popular culture) 論点や〈ヘゲモニー〉による論点という二者択一に対し 土台になった様々な主張を組み上げた。この本において彼 あるのは Fiske であるだろう。 Fiske は楽観論者を自称 今日主流になっているファン研究の誕生と直接関係 一九八九年に出版された『Understanding Popular を闘争の場として主張し、 の研究における〈文化産業〉 において、 (闘争の場) 〈popular culture〉を「進 Fiske はファン研究の には社会変動の \popular による が

ではなく、彼が言う対立はより抽象的であり、経済システであるとする(Fiske 2011: 10)。しかし、階級闘争の問題クストは商品であり、商品は物質化されたイデオロギーを思い起こさせる。そして〈popular culture〉においてテ彼の言う〈闘争〉はプロレタリアとブルジョアジーの闘争彼の言う〈闘争〉はプロレタリアとブルジョアジーの闘争

化でもある。 化でもある。 が生み出した文化でありながら、人々の文 特定の階級・階層を圧倒しようとするのではなく、自己の 再生産を確保しようとする無意図的なシステムであると でulture〉は〈闘争の場〉になる。この場において人々は な立場を占め、権力をもたない。その文脈では〈popular な立場を占め、権力をもたない。その文脈では〈popular な立場を占め、権力をもたない。その文脈では〈popular な立場を占め、権力をもたない。その文脈では〈popular な立場を占め、権力をもたない。このシステムに対して派列 は〈文化産業〉が生み出した文化でありながら、人々の文 特定の階級・階層を圧倒しようとするのではなく、自己の 特定の階級・階層を圧倒しようとするのではなく、自己の 特定の階級・階層を圧倒しようとするのではなく、自己の 特定の階級・階層を圧倒しようとするのではなく、自己の 特定の階級・階層を圧倒しようとするのではなく、自己の は〈文化産業〉が生み出した文化でありながら、人々の文

構造より実践に目を配るのだ(Fiske 2011: 30, 87)。 構造より実践に目を配るのだ(Fiske 2011: 30, 87)。 構造より実践に目を配るのだ(Fiske 2011: 30, 87)。 構造より実践に目を配るのだ(Fiske 2011: 30, 87)。

造〉の快楽である。〈逃避〉の快楽は経験や身体に宿る快Fiske は快楽を二つに区別する。それは〈逃避〉の快楽と〈創は非常に重要な点であるため、ここで簡単に紹介しよう。や〈抵抗〉に含まれている〈快楽〉にも注目する。これまた Fiske は、〈popular culture〉の魅力として〈闘争〉

る(Fiske 2011: 46)。解釈過程をベースにして、テクストウン、それはどうしても社会的に構築されているので、こかつ、それはどうしても社会的に構築されているので、こかつ、それはどうしても社会的に構築されているので、こかつ、それはどうしても社会的に構築されているので、こかっ、それはどうしても社会的に構築されているので、こかっ、それはどうしても社会的に構築されているので、こかっ、それはどうしても社会的に構造と記号、つまり〈意味〉と楽であり、主に感情的で、構造と記号、つまり〈意味〉と楽であり、主に感情的で、構造と記号、つまり〈意味〉と

この二つの快楽は〈popular culture〉におけるテクスト Ecoと同様に、その奪用、解釈や快楽を可能にするテクス ト自体(そして媒体とメディア)の特徴にも注目して記述 ト自体(そして媒体とメディア)の特徴にも注目して記述 しておきたいのは、Fiske が唱えたファンの生産力(創造 しておきたいのは、Fiske が唱えたファンの生産力(創造 しておきたいのは、Fiske が唱えたファン活動の強調 はこの〈popular culture〉における快楽の分析から生じる はこの〈popular culture〉における大力の大力としてある。

て、Fiskeはこれを〈創造〉の快楽であるとする。

の意味の解釈から自ら新しいテクストを作るまでを含め

で Bourdieu を批判しながら、ファン文化における〈闘争「The Cultural Economy of Fandom」(Fiske 1992)論文としてこの創造力・生産力(productivity)を挙げ、後のとしてこの創造力・生産力(productivity)を挙げ、後の最後に Fiske は直接ファンに目を向ける。ファンの特徴

紹介しよう。 紹介しよう。

として見なすのに対し、Jenkins は〈fan culture〉 2011:xxix)。Fiske はファンを ⟨popular culture⟩ 違はファンと〈popular culture〉の区別にある(Jenkins 幾つかの点に関してお互いに影響しあっている。しかし、 の文化を見出す。 Jenkins 自身が述べるように、彼と Fiske の徹底的な相 ン研究〉に置き換えた。Jenkins は Fiske の下で学んでお Jenkins せ Fiske の 〈popular culture〉 Fiske 自身も Jenkins の論文を参照している。 0) 研 究を の延長 に独自 つまり ヘファ

 $214)^{\circ}$

ニティ〉の要求と期待を反映するとする(Jenkins 1992b

は共同体の前提である。故に、Jenkinsの観点から見れば、テクストの密猟者〉(textual poachers)としてのファンダムという定義、そして〈参加型文化〉(participatory culture)とう定義、そして〈参加型文化〉(participatory culture)とう定義、そして〈参加型文化〉(participatory culture)とう定義、そして〈参加型文化〉(participatory culture)とう定義、そして〈参加型文化〉(participatory culture)とう定義、そして〈参加型文化〉(participatory culture)とりに、〈創造〉の快楽と類似点が多い。上記したように、〈創造〉の概念は〈年代の表述、〈解釈の共同体〉としてのファンダムという定義、〈中報、「Pakins の観点から見れば、大きな、「Pakins の観点から見れば、大きな、「Pakins の記念が、「Pakins の記念が、」というに、「Pakins の記念が、「Pakins の記念が、」というに、「Pakins の記念が、「Pakins の記念が、「Pakins の記念が、「Pakins の記念が、「Pakins の記念が、「Pakins の記念が、「Pakins の記念が、Pakins の記念が、

ストの解釈ではなく、特定の〈サブカルチュラル・コミュではなく)、そのテクストはファン自身の参考にしたテクされたテクストであり(ファンの消費対象であるテクストJenkins においてファンのテクストはファンによって制作ファンダムは自然にファン活動から生成されるといえる。

タートレックのファンの皆が共有しているテクストを前提 レックのファンが作る〈fanzines〉や〈filk〉などに注目し にスタートレックファンを例にして論じる。 られているからである。 にしており、またその の制作にはファン個人の解釈がみられるが、その解釈はス ムの集団的な生産物であるとされる。なぜなら〈fanzine〉 のファンの活動を想定するのであると主張する。 はなく、活動においてスタートレックのファン達が常に他 て、そうした活動は単に個人の創造力が表されているので 〈fanzine〉はファン個人の生産物というよりも、 以上のことを具体的に、Jenkins は主にSFファン、特 〈fanzine〉はファン達のために作 彼はスタート ファンダ かくして

威力的であると Jenkins は述べる(ibid)。 者や身体障害者など)においてファンコミュニティは特にのである。そのため、「支配的な文化」の主流から外されのである。そのため、「支配的な文化」の主流から外される社会構造を構築しようとしており、より民衆主義的なもにとってこういうファンコミュニティは個人差を受け入れ

ンを切り離したと言える。確かに Fiske によれば消費者は末論》の批判を一般人の大衆文化に当てて、そこからファ 消費社会の中心から生まれた新たなエリートである。 味〉、〈メディア〉や〈場〉などの支配者になる。こうした る。Jenkins にとってファンは単に熱狂的で過剰な消費者 はなく、 システムに抵抗するが、Jenkins においては、抵抗だけで 消費者〉の像をひっくり返したといえる。 導入し、〈終末論〉 極端にいえば、ファンは限られた領域の中ではあるが、〈意 ではない。ファンと一般消費者の に振り回されているただの哀れな受信者である。 ファンの目から見れば、一般消費者はメディアや文化 〈popular culture〉に〈ファン〉対〈非ファン〉の対立を Jenkinsの最も典型的な主張に目を向けれ 新しく、更にはよりよいものである共同体まで作 が描いた〈システムに支配されている 間に質の差がある。 あるいは、〈終 ファ ば、 少々 彼 ンは 産業

Uている。彼の主張はファン研究には強い影響を与えていJenkins の観点はファン研究の最も楽観的な立場を代表

楽観主義へ批判を行っている。 が、Jenkins 自身の姿勢と彼の〈参加型文化〉に見られるが、Jenkins 自身の姿勢と彼の〈参加型文化〉に見られるメディアにおける権力に着目した Christian Fuchs(2014)以ディアにおける権力に着目した Christian Fuchs(2014)が、同時に批判も集めている。ファン研究の立場から批るが、同時に批判も集めている。ファン研究の立場から批

けで、 Adorno の批判的な立場におけるサブカルチャー に見てみよう。 う上での最も注意すべき特徴をファン研究の観点から いて、社会生活におけるファンがテクストの位置付けを行 議論が提起されているのだ。これまで取り上げた文脈にお ストはサブカルチャーという何かに属しているとされるだ いに至るまで、かなりの幅がある。 いから、Jenkins の観点におけるサブカルチャーの意味合 かもしれない。しかし前節 論点はサブカルチャー ファンが行うテクストの社会的な位置づけについての その先には無視することのできない、長い、激しい という一つの言葉で片 の要約からも窺えるように、 要するに、ファンテク 付けられる の意味合

/ァン研究においてテクストと呼ばれているものは

れ、二〇世紀冒頭に消費社会と呼ばれるようになった新 象徴形態の媒体産業の誕生とともに象徴形態が商品化 が推進され Thompson が指摘するように、 デ ア発展とともに二〇世 おける変遷、特に象徴形態の伝播とその生 たという変遷が非常に強い影響を与えた。 現代社会の形 紀 の生産物 であ 成には る。 象徴 産性 形

い社会形態が生まれた

(Thompson 1990)

との紐帯に宿る権力であるといえる。 体自体の特徴、 役割を果たす。 こうしたメディアの制度はコミュニケーションの新しいあ 出した。 形態の媒体化は新しいコミュニケーションの可能性を生み る権力ではなく、 に宿る権力である。 ミュニケーション過程におい いている。 り方の核であり、 信)として把握するならば(Thompson 1995: 10)、 コミュニケーションを象徴形態の交換 また象徴形態自体を一 媒体の諸産業は単に 換言すれば、メディアの〈内容〉 その生産性、またその分配性などにも基づ この状況においてメディアの権力は確 コミュニケーションの商品化に中心的 商品に 要するにその権力はイデオロギー なった象徴形 て表れたメディアの位置 旦除いても、その権力は、 〈メディア〉と呼ばれており 態の媒体と社会構 (生産 を問わず、 一、伝達 付け によ .

化や欧米におけるアニメファン活動などは象徴形態の媒体この観点から見れば、日本におけるアマチュア漫画の文

形成に決定的な影響力を与えたといえる。 メファン活動には VCR の普及が、それぞれファンダムのア漫画文化にはオフセット印刷技術が、欧米におけるアニの変化がもたらす社会変動の事例と見なされる。アマチュ

特徴は 会話)、〈mediated quasi-interaction〉(例:本やテレビなど、 〈媒体化された相互作用〉には、〈face-to-face interac化に応じる相互作用の媒体化も指摘するべきである。 会の形態変遷と象徴形態の媒体化と商品 えた〈diffused audiences〉の概念がある。 理論を踏まえて Abercrombie & Longhurst (1998) 体の議論はファン研究において重要である。 オーディエンス論からみれば、 があると Thompson は述べる(Thompson 1995: 82-87)。 マスコミによるコミュニケーション)という、三つの種類 そうした〈共同体〉を可能とする土台に、象徴形態の媒体 を可能にしたと Thompson は述べる(1995: 35)。同じく 象徴形態の生産性、三)時間と空間の剥離、である。 の特徴は次のようなものである。 例:直接の会話)、〈mediated interaction〉 形態と変遷について少し述べておこう。 Thompson によれば、 (diffused audiences) Anderson が言う「 媒体化されたコミュニケーショ の概 想像の共同 念に触れる前 Thompson の象徴形態と媒 一) 象徴形態の固定、二) \face-to-face interaction, 体 化を中心とする この概念は 例えば、この 例:電話 その の成立 この が 唱

常生活の商品化〉と、国家の衰退による自己アイデンティ生の土台には、サービス産業の増加と身近な関係をもつ〈日 から生まれる〈商品化された世界〉には消費によってアイ その対象として中心に据えた新たな観客(audience) ら、今注目しておきたいのは、サービス産業の急増や国家 業化が進む。脱工業化につれて起こった様々な変化の中 主義が徐々に衰退し、七○年代から九○年代にかけて脱工 てこの情報技術による経済発展につれて、五〇年代の産業 適用技術の発展と合理化に直接依存するようになる。 や生産力、つまりは経済力が情報の生成技術、 の特徴はおおよそ次のようである。まず企業などの競争力 後に位置付けられる〈情報革命〉を皮切りに引き起 といえる。Castells(1996)によれば情報社会は七○年代前 デンティティを構築する、 ティの危機が挙げられるだろう。かくして、九〇年代前後 の権利の衰退である。 報社会〉と呼ばれている新たな社会形態が引き起こされた つの原動力であるが、そうした媒体の絶え間ない変遷によっ Thompson が述べた象徴形態の媒体化は近代におけ べるように、九〇年代への移行には、〈broadcasting〉 !衆が誕生する。更にGray, Sandvoss & Harrington (2007) (少なくとも二〇世紀冒 (narrowcasting) 六○年代と異なって、ファン研究が 〈diffused audiences〉という新た (ナローキャスティング) 頭の近代以降)、〈情 、処理技術や そし の誕 . る 一 か

いるということに注意しておこう。増殖するファン研究がこうした観衆に注目して論じられての状態に表されているといえる。ここでは、九〇年代から時代への移行も見られる。その変化も〈diffused audiences〉時代への移行も見られる。その変化も〈diffused audiences〉

五 社会生活―テクストの意味と社会構造

Thompson (1990) によればイデオロギーによって意味を構造の間にある結び付きについて述べていくが、焦点をように解釈するのか、どのような意味を解読するのか、どのように解釈するのか、どのような意味を解読するのか、どのここでは、どのような人がテクストを解釈するのか、どのここでは、どのような人がテクストを解釈するのか、どのここでは、どのような人がテクストを解釈するのか、とのテクストではなく、象徴形態自体と社に述べた。ここからは、媒体ではなく、象徴形態自体と社に述べた。ここからは、媒体ではなく、象徴形態自体と社に述べた。ここからは、媒体ではなく、象徴形態自体と社に述べた。

もの)と社会構造(構造化された非対称的な諸人間関係)〈意味〉(象徴形態又はメッセージの解釈過程の果てにある条件のもとに行われるといえる。ひとまずイデオロギーは

性は制限される。そういった意味の制限は社会構造というロギーによって特定のメッセージが本来に持っている多義

号論的にイデオロギーを定義した観点から見れば、

イデオ

象徴形態)は特定の力関係を維持する。Eco (1968) が記

いう論点にアプローチしていく。活においてファンのテクストはどのように扱われるか、とイデオロギーという広い意味をもつ概念の枠内で、社会生の関係を記述する概念であるといえよう。ではここからは、

対化する、三番目の観点を挙げよう。その観点は、上述し がイデオロギーに抵抗するとされていると述べた。この二 研究においては、〈抵抗〉、〈快楽〉、〈遊び〉などによって、人々 が中心的だった。そして Fiske、Jenkins や初期の Gramsci、Barthes などにおいては、イデオロ ルシシズムに着目してファン研究を発展させる Sandvoss つの典型的な観点に加え、イデオロギーの問題をかなり相 前に述べたように、マルクス主義、 (diffused audiences) の研究にある。 のような、 社会条件におけるナ フランクフルト学派 ーギー ファン 0)

大筋にはこうした三つの観点は次のように扱える。最初の二点は Abercrombie & Longhurst の議論を参考として、〈一〉テクストの決定性(テクストの意味が押しつけられる事)と、〈二〉観客の決定性(テクストの意味が押しつけられる語者の主体性)によって特徴付けられる。また三番目の点に関して Sandvoss (2005a; 2005b) を参考とすると、〈三〉 点に関して Sandvoss (2005a; 2005b) を参考とすると、〈三〉 たクストの〈中性意義〉(テクストの意味が押しつけられる。 まついて少し述べよう。

五―ー テクストの決定論

備えられているとする主張がある。フランクフルト学派やあるため、逸脱的な解釈が生まれないように様々な強制が ある。 ある。 こうした構造に影響を与えられないと言える。 と深く関わる文化やイデオロギーをめぐる論説はその においてイデオロギーの影響を認めるこうしたマルクス主 Antonio Gramsci が唱えた 部構造に対して逸脱的な解釈を生み出すのは困難なことで ストには構造的に決定されている特定の読みがあり、下 は必然的に、下部構造の決定から逃れられ ス主義の観点からみれば、テクストの意味、またその解釈 分析のための概念として発展されていない。 オロギーという言葉は批判的な意味を持っており、これも 系化されておらず、初期 取り扱うための理論が不十分であると言える。 (イデオロギー)はむしろ既存の社会形態の維持に必要で この強力な経済決定主義に対して、 上述したように Marx において〈文化〉の概念が体 のマルクス主義にはテクストにおける意味の のマルクス主義の観点ではイデ 〈文化へゲモニー〉は社会構造 テクストの意味 ず、 初期の また同時に 特定のテク 意味の論点 いマルク 例

にすれば、上述した Adorno の子供の遊びの議論と同様論が無関係ではない。Marx の商品フェティシズムを参考この論点において Marx が唱えた商品フェティシズム

義の例である

あるいは評価しているのはコンサートのチケットに使っためるいは評価しているのはコンサートのチケットに使った価値〉自体が完全に消滅しているかのどちらかと言える。価値の機能を果たすように見せかけるというものである。 Adorno は音楽の例でこれを説明する。人々はコンサートを聴きに行くとき、単に音楽を楽しんでいる(使用価値)を聴きに行くとき、単に音楽を楽しんでいるか、或いは〈使用のである。と思っているが、実は音楽ではなく、彼らが楽しんでいる、と思っているが、実は音楽ではなく、彼らが楽しんでいる。

り、受動的な受信者にすぎない、ということになる。トを受け取る側はその社会構造の条件に気がつかない限クストの読みは社会構造によって規定されており、テクスゆえにいずれの場合でもテクストの決定論に従うと、テ

見出す商品フェティシズムだといえよう。

用価値の見せ掛け)は、実際にはそのモノにはない性質をすると、このお金(モノ)に宿る魅力(音楽の楽しみ・使お金である(Adorno 1938; Strinati 1995; 56)。少し単純化

五―二 観客の決定論

る。しかし、Hall の著作も含めて、前述したように、deの〈encoding/ decoding〉図式から非常に影響を受けてい視点を抵抗パラダイムと呼ぼう。このパラダイムは Hall 本稿では観客の決定論がテクストに対して持っている

日常的な闘争の動機は快楽に見出される。要するに、上く、ということが指摘される。また Fiske によれば、その 述したのは Fiske である。テクストの決定論者が主張するテクストに対して抵抗的な使用行っていることを明確に記 ことによって構築される多種多様な解釈自体は、 Certeauをベースに、 釈、またテクストの生産はその闘争の中心に位置付けられ 階層や文化的闘争と繋がっている。かくしてテクストの解 述したように、Fiske にとって、意味の構築である生産性 目的のために利用し、闘争によって人間関係を築いてい いう前提の上に、その人々がテクストを資源として各々の 人々が様々である(社会階層や文化などによる差異)と で、抵抗パラダイムにおいてはまず、テクストを受け取る 行為になる。カウンターカルチャーの背景を連想させる形 日常生活において観客がテクストを様々な意図で利用する ように、イデオロギーが意味を制限するものだとすれば (productivity) による快楽は、 ファン研究においては日常生活上 直接的に社会生活における 抵抗的な

1992b) や日本の同人誌(Kinsella 1998: 299)などが説明を用いて、SFファンダムのファンジン(Jenkins 1992a:を用いて、SFファンダムのファンジン(Jenkins 1992a: ここで、Fiske が Bourdieu を参考にして唱えた「popular ここで、Fiske が Bourdieu を参考にして唱えた「popular ここで、Fiske が Bourdieu を参考にして唱えた「popular にはいい。

されている。

Jenkins のコミュニティとしてのファンダムという見解は Fiske の理論と繋がっている。彼によればファンダムには Fiske の理論と繋がっている。彼によればファンダムにおいてファン達はテクストの逸脱的な解釈に留まらず、新たなコミュニティを築く。この文脈の中では、Jenkins がたなコミュニティを築く。この文脈の中では、Jenkins がかないように、「Entering in to fandom means abandoning preexisting social status […]」といえる(Jenkins 1992b: 2120)。

おり、 ておく。Hills の批判は抵抗パラダイムが描く生産者と消 よって、Jenkins以降よく現れるようになった〈ファン= が市場とファンの相互関係にもう一度焦点を当てることに の議論についてはここで紹介できないが、ひとまず、Hills テクストの使用価値と交換価値に改めて論点をおく。そ め Hills はマルクス主義やフランクフルト学派を再評価し、 的な消費者でもあると指摘する(Hills 2002: 29)。その 抵抗的な活動家であるとするのなら、同時にファンは理 立、或いは〈良い消費者〉(=ファン)対〈悪い消費者〉(= をとる。Jenkinsの研究には 般観衆)の対立が見られると批判する。そしてファンが ファン研究において、Hills 対〈消費者=悪い〉の単純な対立を超えようとして 抵抗パラダイムを相対化していたということを述べ 〈ファン〉対〈消費者〉 (2002)はより中立的 な観 の対 植 た 点

さとイデオロギー問題の軽視に向けられていた。費者との間の権力対立の単純図式、そして商品市場の複雑

と呼んでいるものが内在している。 と呼んでいるものが内在している。 と呼んでいるものが内在している。 と呼んでいるものが内在している。

五一三 テクストの〈中性意義論〉

抗するのだとすれば、その抵抗行為がいったい何に対して出発する。そしてこの批判とは、ファンダムや消費者が抵ないが、Sandvoss(2005a)のいうように、理論的に(経ないが、Sandvoss(2005a)のいうように、理論的に(経ないが、Sandvoss(2005a)のいうように、理論的に(経るといえる。その傾向へのアプローチは Hills の批判からるといえる。その傾向へのアプローチは Hills の批判からるといえる。その傾向へのアプローチは Hills の批判からるといえる。その傾向へのアプローチは Hills の批判からるといえる。ここでは、本稿で「テクストの〈中性意義〉」と呼んでいる、ここでは、本稿で「テクストの〈中性意義〉」と呼んでいる、ここでは、本稿で「テクストの〈中性意義〉」と呼んでいる、

行われているのか、抵抗的な解釈とはいったいどんな解釈行われているのか、またそうした抵抗が誰の権力を損なうのか、であるのか、またそうした抵抗が誰の権力を損なうのか、であるのが況を説明できるのは〈diffused audiences〉にれば、その状況を説明できるのは〈diffused audiences〉におけるナルシシスト的な主体であるとされる。

セスから生まれる。 セスから生まれる。 といったプロペクタクル化〉と個人の〈ナルシシスト化〉といったプロペクタクル化〉と個人の〈ナルシシスト化〉といったプロペクタクル化〉と個人の〈ナルシシスト化〉といったプロ

Abercrombie & Longhurst は Debord を 根拠として、スペクタクルの世界ではメディアとの接触が日常的で、消スペクタクルの世界ではメディアとの接触が日常的で、消スペクタクルの世界ではメディアとの接触が日常的で、消みいる。Baudrillard に準拠して、このプロセスでは物と述べる。Baudrillard に準拠して、このプロセスでは物と場から乖離している画像・映像(images)が急増しており、その乖離ゆえにそうした像には命が宿っているように見えてくる、と彼らは述べる。

てはいけない。

ここで論じられてい

るスペ

クタクルの

世界にお

て、

では人生は常にパフォーマンスである。また個人は自分自世界が常にスペクタクルであるとするならば、その世界

的な主体、又はファンは、もはやテクストの解釈者、 の条件を説明できるが、そうした仮説は社会現実と混合し を特定の社会形態に位置付けるべきであることを強調した 述べるように、このように語られるナルシシスト的な主体 成の議論に当たるが、ここで Sandvoss(2005a; 2005b) て構築されるファン、つまりファンのアイデンティティ形 トであるといえることになる。この議論は、テクストによっ かくしてファンはテクストの一部分であり、世界はテクス いは消費者ではなく、テクストの主人公だとされることだ。 Longhurst 1998: 95)。ここで興味深いのは、ナルシシスト よって構成されると彼らは主張する(Abercrombie & (1991) が主張するように、再帰的であり、 るにナルシシスト的な主体のアイデンティティは Giddens 身がそのパフォーマンスの主役を常に意識的に演じるた (place) から乖離した日常というのは、ナルシシズム 要するに、〈diffused audiences〉が重視した歴史と ナルシシズムとつながると著者たちは述べる。 自己物語 ある

いて「テクストの〈中性意義化〉」と呼んでいるものを唱Sandvoss は述べる。以上を踏まえ、Sandvoss は本稿におえるため、ファンとテクストの間の距離がゼロであるといテクストの意味はファンの解釈と等しいものであるとい

矛盾といった論点も、少なくとも理論的に解決できるとまた Hills が指摘したファンにおけるイデオロギー闘争のパラダイムの曖昧さの問題へのアプローチが可能であり、える。まさにこの〈中性意義性〉によって、先述した抵抗

える。 Sandvossの主張である。それ故、Sandvossはテクストの〈中 は世界を見るたびに、 reflexive〉ではなく、〈自己反射的 =self-reflective〉 格を持つとされており、その性質は 世界は主人公を中心にして構成されていることになる。そ なっていると感じており、又は別の言い方をすれば、 場合、多くの解釈が可能になるだけではなく、どんな解釈 距離が縮めば縮むほど、テクストの多義性が増大するとい Sandvoss は主張する。 ると Sandvoss が強調する。 でも可能になると Sandvoss は主張する 126, 138)。スペクタクルの世界では人々は世界の中心に 上述した観客の決定論 あるいは世界は、 鏡像しか見られ しかし、スペクタクルの世界で見られるゼロ ナルシシストというファン像は非常に再帰的 を唱える (2005a; 2005b)° ないという。この条件下でテクスト ナルシシストの鏡であるというのは 外》 に従うと、ファンとテクストと なぜなら、このナルシシスト の世界ではなく、常に自分自 〈自己再帰: (Sandvoss 的= 距 この であ 品な人 self-0

この〈中性意義性〉はイデオロギーに対しても明確に深

才口 持っているということも出張できないことはないが、 理を通して、〈抵抗論〉を無効化にした徹底的な支配力を とになる。この観点から見れば、今日よく議論される、ファ によって機械的に維持される事になる。 社会の現状がテクストの意味ではなく、その形態 うでもよくなっているならば、〈意味〉 刻な問題を提起している。要するに、 ン活動を支えるネット上のプラットフォームは、 オロギーの効果は意味ではなく、形態自体にあるというこ の状況においても Thompson を踏まえて上述したように、 ロギー は機能しなくなるとでも言えるのだ。かつ、こ テクストの意味 の操作によるイ 換言すれば、イデ 環境の管 (媒体) がど

る(Sandvoss 2005a: 149; 2005b: 835)。 はおいてナまた Sandvoss によれば、テクスト(世界)においてナまた Sandvoss によれば、テクスト(世界)においてナまた Sandvoss によれば、テクスト(世界)においてナまた Sandvoss 2005a: 149; 2005b: 835)。

はナルシシストの主体を想定した場合のことである。

dimentional 次元的社会においては、 可能性を唱える。Sandvoss によれば Marcuse が唱える一 で絶対的な権力に注目して、Sandvoss は Marcuse この主体性の過剰化から生じる、イデオ man」を参照しながら、〈一次元的ファン〉 他者性の欠落につれて、 口 ギ 1 現状維持 0) 0 不可 | One 視

存する人間に該当できない 見れば最終的に、Fiske や Jenkin が重視する〈ファンの 会的抵抗の場として階層の消失が確証されており、〈 テムであるとする。Sandvossによればファン研究では社 抑制されているとされる。この全体主義を果たすのは に抵抗しようとする全ての勢力が無力化され、社会変動 に観察できる一つの傾向を説明できる便利な仮説だが、 生産力)、〈ファン活動〉には抵抗的な性質、又は想像力 元的ファン〉の存在を示唆しているとされる。この観点で ン〉、または完全なナルシシスト的なファン像は社会現実 (Sandvoss 2005b: 836)。ところが、こうした〈一次元的 (新しい物事を生み出せる能力)、がもはやないといえる (Sandvoss 2005a; 2005b)° —技術的 コファ 一次 実

終わりに

しながら、ファン研究理論の展開の大まかな紹介を行った。 との関係を重視 シテクスト (嗜好の対象であるメデイア)との関係を重視 に至る主張を見た。この議論を通して、ファン(主体)とファから新たに生じるイデオロギーの絶対的な権力を主張する理論から、主体 をイデオロギーの絶対的な権力を主張する理論から、主体 本稿においてはファン研究を中心にして、主体を否定す

ものである。(1)本論文は二○一二年に完成した修士論文の一部を加筆修正した

- "(To see) popular culture as a site of struggle" "This approach sees popular culture as potentially, and often actually, progressive (though not radical), and it is essentially optimistic, for it finds in the vigor and vitality of the people evidence both of the possibility of social change and of the motivation to drive it" (Fiske 2011: 17-18)
- "[A] commodity is ideology made material" (Fiske 2011: 10) °

3

- (4) "[T] he economic system, which determines mass production and mass consumption, reproduces itself ideologically in its commodities," (ibid)
- (1984, The Practice of Everyday Life, Berkeley, University of California Press.
- (6) "It is a study of enunciation, not of the language system" (Fiske 2011: 30) この点に関しては、一九七六年に出版された、P. Ricoeur の『Interpretation Theory. Discourse and the Surplus of Meaning』 (Ricoeur 2006) の主張と同じである。しかしFiske は Ricoeur では無く、de Certeau を参考にしている。
- (\vdash) "The work of popular pleasure takes two main forms: evasion $[\cdots]$ and productivity" (Fiske 2011: 40)
- (8)しかし、Fiske の Bourdieu の扱い方は荒くて不適切であるとよ(8)しかし、Fiske の Bourdieu の扱い方は荒くて不適切であるとよ

- "[Bourdieu] underestimate the creativity of popular culture there are forms of popular cultural capital produced outside and its role in distinguishing between different social and often against official culture capital" (Fiske 1992: 32) formations within the subordinated. He does not allow that
- 10 "Fiske and I disagreed about whether fan practices differed from less excessive popular readers in degree but not in kind as extending the interpretative and appropriative activities." expectations and literacy practices. Fiske saw these fan texts as representing a distinctive tradition with its own genre seeing fan fiction not simply as traces of interpretation, but stressed the cultural specificity of fan cultural production in "kind" or "degree" from other forms of consumption. I (Fiske 2011: 116) (Jenkins 2011:xxix)。 そして Fiske がこう語る "Fan may differ
- 11 ファンが作る雑誌。 リーがその主たる内容である。 特に特定の作品のレビューやサイドストー
- 12 "Fan music-making" (Jenkins 1992b: 215)
- 13 "Fans view this community in conscious opposition to the mundane' world inhabited by non-fans" (Jenkins 1992b: 213)
- 14 る活動を支えるファン活動の制度(ファンの実践の制度化)に 確か Textual Poachers (1992) において、 エンスの間に連続性があると述べるが、その連続性よりさらな 着目したいと述べる(Jenkins 1992: 54)。 ファンと一般オーディ
- 15 "I have characterized communication as a distinctive kind of social activity which involves the production, transmission and

- reception of symbolic forms" (Thompson 1995: 18.
- $\widehat{16}$ 順番で、fixation, reproduction, space-time distanciation. (Thompson
- "Mediated interaction" (Thompson 1995: 81)

- 18 "I shall use the term 'mas communication' to refer to the institutionalized production and generalized diffusion of symbolic goods via the fixation and transmission of information or symbolic content" (Thompson
- 19 Abercrombie & Longhurst いねらい "aestheticization of everyday ている点に注意すべきである。 続に行っているプロセスだが、 Longhurst において "aestheticization"と "commodification" は連 のような Baudrillard 的な表現を使う。しかし Abercrombie & 82, 85-88, 96 を参考)。 そのためこの(commodification of everyday life) "aestheticization" だといえる(Abercrombie & Longhurst 1998 ているが、その "aestheticization" が "commodities" から生じる life" (Abercrombie & Longhurst 1998: 85) という表現が使われ 同じプロセスではないと示唆し
- 20 映画館で上映されている映画の観客と異なって、一つの text の contemporary society, everyone becomes an audience all the H "The essential feature of this audience-experience is that, in 集中的な観衆ではないから〈diffused〉と呼ばれる。論者によれ time" (Abercrombie & Longhurst 1998: 68,
- 21 "The analysis of ideology [...] is primarily concerned with mobilized in the social world [···]" (Thompson 1990: 56) of power. It is concerned with the ways in which meaning is the ways in which symbolic forms intersect with relations

- (22) Abercrombie & Longhurst によれば、順に "Dominant Text position"と "Dominant Audience position" (1998: 18) とされる。
- (\text{\text{\text{3}}}) (neutrosemy) "texts are polysemic to a degree that they become neutrosemic" (Sandvoss 2005a: 26) \(^{\text{\text{2}}}\)
- (24) Althusser の〈Ideological State Apparatus〉もその例としてあげられる(Strinati 1995 を参考に)。
- (\(\pexists\)) "If the commodity in general combines exchange value and use value, then the pure use value, whose illusion the cultural goods must preserve in a completely capitalist society, must be replaced by pure exchange value, which precisely in its capacity as exchange value deceptively takes over the function of use value." (Adorno 1938: 38-9)
- (26) Abercrombie & Longhurst 1998: 16
- (전) "The everyday life is where the contradictory interest of capitalist societies are continually negotiated and contested" (Fiske 2011: 26)
- (%) "These antagonisms, theses clashes of social interest [···] are motivated primarily by pleasure: the pleasure of producing one's own meaning of social experience and the pleasure of avoiding the social discipline of power-bloc." (Fiske 2011: 39)
- (29) ところが Fiske において Bourdieu の解釈や [popular culture 2005を参照のこと)。
- (3) Kinsella は Fiske を参考にしており、そして Fiske の立場を明確

- in №° "Yonezawa Yoshihiro sees the expansion of parody manga as an attempt to struggle with and subvert dominant culture on the part of a generation of youth for whom mass culture, which has surrounded them from early childhood, has become their dominant reality. [···] Yonezawa interprets parody manga as a highly critical genre that attempts to remodel and take control of "cultural reality" (Kinsella 1998: 303)°
- "On the one hand, there is the construction of the world as spectacle and, on the other, the construction of individuals as narcissistic" (Abercrombie & Longhurst 1998: 75)

- (%) "Contemporary society makes the world in to spectacle because it is organized by capitalism, which has commodified everything and has thereby colonized everyday life" (Abercrombie & Longhurst 1998: 82)
- (3) (aestheticization of everyday life)
- (弘) "Limages」 come to have life of their own independent of the objects of which they are images" (Abercrombie & Longhurst 1998: 87)
- (35) "Life is a constant performance; we are audience and performer at the same time; everybody is an audience all the time. Performance is not a discrete event" (Abercrombie & Longhurst 1998: 73)。彼らは Goffman などを参考しながら、パフォーマンスの議論をする。
- (36) Sandvossの言葉で〈美学的距離〉(aesthetic distance) (Sandvoss 2005a: 2005b; 2007)
- (37)Sandvossの言葉で言えば"Fan texts, like all forms of communication,

- are inherently ideological even, or particularly, if they have nothing to say in themselves" (2005a: 149)°
- そもそも他者自体は自己投影の一種に過ぎない、と言わざるを 得なくなるだろう。
- 39 "[fan] cannot account for [...] a meaningful engagemen status quo"(2005a: 155)また別の論文で次のように述べる: themselves factors in maintaining the subsistence of the social the text, which reflects a lack of aesthetic distance, becomes meaning and the appropriative dominance of the fan over thus, derives not from encoded meanings but from their very 149) そしてのちにこう述べる:"the absence of any ideological with otherness, and thus a premiss of social change" (2005a: absence" (2005b: 836) "The profound social and cultural significance of popular texts
- "non-terroristic economical technical system" (2005a: 153
- 41 but as a space of social resistance as outlined by Marcuse" "studies on fandom [...] corroborate the disappearance of class not as a category of social hierarchy, which still persist,

Abercrombie, Nicholas; Longhurst Brian, 1998, Audiences, A Social Theory of Performance and Imagination, London, Sage.

Adorno, Theodor, 1991 (1938), "On the Fetish Character in Music mass culture. London, Routledge. and the Regression of Listening", The culture industry: Selected essays on

Adorno, Theodor, 2001 (1951), Minima Moralia: Reflexiones desde la vida dañada Madrid, Taurus

Adorno, Theodor; Horkheimer, Max, 1994 (1969), Dialectica de la Ilustración, Madrid, Trota

Anderson, Benedict, 1991, Imagined Communities, Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, London, New York, Verso Barthes, Roland 1956, Mitologías, México, Siglo XXI.

Barthes, Roland, 1975, The Pleasure of the Text, New York, Hill and

Barthes, Roland, 1977, *Image Music Text*, London, Fontana Press

Barthes, Roland, (et al), 2006, *Análisis estructural del relato*, México, Ediciones Coyoacán.

Castells, Manuel, 1996, La Era de la informacion, La sociedad red, Vol 1-3. Mexico, Siglo XXI

Coma, Javier, 1978, *Los Comics, Un arte del Siglo XX*, Madrid, Editorial Hacer, Mexico, Universidad Iberoamericana Labor de Certeau, 2000 (1980), La Invencion de lo Cotidiano, I. Artes de

Eco, Umberto, 1968 (1964), *Apocalípticos e Integrados*, Barcelona, Editorial Lumen

- Eco, Umberto, 2005 (1968), La estructura ausente, Introducción a la semiótica. México, Debollillo.
- Fiske, John, 1992, "The Cultural Economy of Fandom", Lewis, A Lisa (ed) The Adving Audience. Fan Culture and Popular Media, London, Routledge. Fiske, John, 2011 (1989), Understanding Popular Culture, London and New
- Fuchs, Christian, 2014. Social media: A critical introduction. Sage.

York, Routledge.

- Giddens, Antony, 1991, Modernity and self-identity: Self and society in the late modern age. Stanford university press.
- Giménez, Gilberto, 2005, Teoria y Análisis de la Cultura, Vol.1, México, CONACULTA Gray, J., Sandvoss, C. & Harrington, L, (eds), 2007, Fandom, Identities and Communities in a Mediated World, New York and London, New York University Press.
- Hills, Mat, 2002, Fan Cultures, London and New York, Routledge.
- Jenkins, Henry, 2011, "Why Fiske Still Matters", Fiske, John. Understanding Popular Culture, London and New York, Routledge.

Press.

- Jenkins, Henry, 1992a, Textual Poachers, Television Fans and Participatory Culture, London, Routledge.
- Jenkins, Henry, 1992b, "Strangers No More, We Sing': Filking and the Social Construction of the Science Fiction Fan Community", Lewis, A Lisa (edit) *The Adoring Audience, Fan Culture and Popular Media*, London, Routledge,
- Kinsella, Sharon, 1998. "Japanese Subculture in the 1990s: Otaku and the Amateur Manga Movement" Journal of Japanese Studies, 24: 2 289-316 Kinsella, Sharon, 2000, Adult Manga, Cultura and Power in Contemporary Japanese Society. Honolulu: University of Hawai, i Press.

- ewis, A Lisa (ed), 1992, The Adoring Audience. Fan Culture and Popular Media, London, Routledge.
- Macdonald, Dwight, 1983 (1962), Against the American grain. A Da Capo Paperback.
- Morin, Edgar, 1979, L'esprit du temps 1 : Névrose
- Ricoeur, P, 2006, Teoría de la Interpretación, Disucurso y Exedente de Sentido, México, Siglo XXI
- Ricoeur, P, 1981, Hermeneutics and the Human Sciences. Essays on Language Action and Interpretation, Cambridge, Cambridge University Press.
- Sandvoss, Cornel, 2007, "The Death of the Reader? Literary Theory and the Study of Texts in Popular Culture", Gray, Jonathan (ed), Fandom, Identities and Communities in a Mediated World, New York and London, New York University Press.
- London, New York University Press.
 Sandvoss, Cornel, 2005a, Fans, The Mirror of Consumption, UK-USA, Polity
- Sandvoss, Cornel, 2005b, "One-Dimensional Fan, Toward an Aesthetic of Fan Texts" *American Behavioral Scientist*, Vol.48 No.7 822-839, Sage Publications.
- Strinati, Dominic, 1995, An Introduction to Theories of Popular Culture London and New York, Routledge.
- Thompsn, John, 1990, Ideology and Modern Culture, Critical Social Theory in the Era of Mass Communication, UK-USA, Polity Press.
- Thompsn, John, 1995, The Media and Modernity, A Social Theory of the Media UK-USA, Polity Press.
- Touraine, Alain, 2006 (1992) , Critica de la modernidad, México, Fondo de cultura económica.